

半導体漫遊記

湯之上隆

(349)

前回の本コラムで、米インテルが2024年第2四半期に19・8億ドルの赤字となり、従業員の15%にあたる15000人を削減し、株式配当を停止することなどを説明した。1992年から2017年まで世界半導体売上高で第1位に君臨してきたインテルは、どこで何を間違えたのだろうか？

まず第1のミスジャッジは05年に起きた。インテル5代目CEOのポール・オッテリーニは、米アップルから 아이폰用プロセッサの生産委託を受けた。しかしその当時、携帯電話は普及していたがスマホというものは存在しなかったし、どのくらいの市場規模になるかもわからなかった。そのため、オッテリーニCEOはアップルからの生産委託を断ってしまった。その後 아이폰用プロセッサは、最初は韓国

のサムスン電子が受託生産し、14年以降はTSMCが生産することになった。そして07年に 아이폰をリリースした後、スマホの出荷台数は急激に増大し、16年には年間14億台を超えた。その上「スマホがあればPCは要らない」人が増え、ス

7代目CEOのボブ・スワンは生成AIの可能性を見抜くことができず、オープンAI社の株式を購入しなかった。その後、オープンAI社が22年11月30日にChat GPTを公開すると、瞬く間に世界中に普及していき、オープンAI社の株式の評価額は800億ドル以上に高騰した。結局インテルは、生成AIという「大魚」をつかむことができなかったわけである。

それまでインテルは05年に65nm、07年に45nm、09年に32nm、11年に22nmと2年おきに微細化を進めてきた。ところが14nmの立ち上げに3年かかり、さらに16年に立ち上げようとした10nmは、その後5年以上立ち上らなかった。

き、オッテリーニCEOは「効率的な経営」を掲げた。ところが、この2万人の削減はインテルの微細化を大きく狂わせることになってしまった。

化の時計の針は、二度と元には戻らない。そして今、のトップ争いに返り咲くことは、もはやないかもしれない。(微細加工研究所・所長)

インテルはどこで何を間違えた？ 不調の根本は05年に

マホがPCを駆逐していった。その結果、PC用プロセッサを主力ビジネスとしていたインテルは、10〜16年にかけて売上高が伸び悩むことになった。

このようにインテルは2つのミスジャッジにより、飛躍するチャンスを逃してしまった。しかし現在、インテルがTSMCやサムスン電子に、半導体の微細化競争で大きく後れを取ることになったのは、これらとは別の原因がある。それは05年から09年にかけて、約10万人いた社員を2万人削減したことである。このと

21年に第8代目CEOに就任したパット・ゲルシンガーが、TSMCに追いつこうと積極果敢な微細化計画を立てたが、うまくいっていない。

次に第2のミスジャッジは17〜18年に起きた。17〜18年ごろにインテルが約10億ドルでオープンAI社の株式15%を取得できる機会があった。ところがインテル

減じたことにより次世代の14nm、次々世代の10nmの開発が手薄になり、その後苦境を招いている。いったん狂ってしまった微細

図1 Intelの歴代CEO、Node (nm)、半導体売上高、社員数、ミスジャッジと不調の根本原因

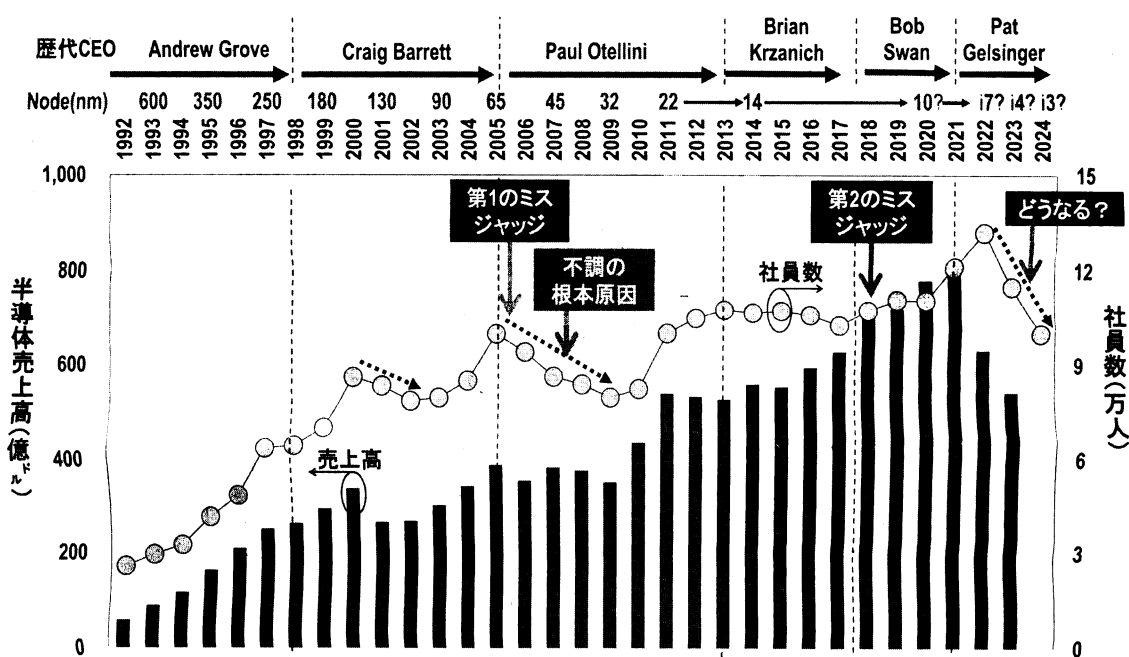


図1 Intelの歴代CEO、Node (nm)、半導体売上高、社員数、ミスジャッジと不調の根本原因